

山岳小説

2014.1.29

久家 隆男

昨年秋に思いもかけぬ病に掛かり、しばらく山歩きができなくなった。このため読書の機会が増え、主に山岳小説を多く読んでいる。21世紀になってからの山岳小説の作家には、大倉崇裕、笹本稜平、真保裕一、谷甲州等々がいるが、特に大倉崇裕と笹本稜平は作品数が多い。両作家を比較すると、個人的は笹本稜平の作品の方が印象に残る。理由は、大倉崇裕が架空の山を舞台にしているのに対して笹本稜平の場合は実存の山であるからで、小説であるから架空の地形を含めているだろうが笹本稜平の方が臨場感がある。

以下に笹本稜平の5作を簡単に紹介する。山好きの人ならどれを取っても一気に読み通すことになるだろう。

【環るべき場所】 2008年 文芸春秋

翔平はヒマラヤのK2で最良のパートナーである聖美を亡くし失意の底にいた。4年後、ツアー会社を営んでいる友人の亮太からブロードピークへの公募登山のガイドに誘われる。ブロードピークでは同じく公募登山のニュージーランド隊が先行するが、彼らは8,000mを超す高所でブリザードに遭い行動不能に陥る。翔平は、医療品会社の会長で自社製のペースメーカーを埋め込んでいる神津と、神津の秘書であり穂高などで厳冬期初登の記録を持つ竹原との二人のツアー客の協力を得て救助に向かう。しかし、アルゼンチンの怪しげな3人組に固定ロープを切られ、危機に直面する。

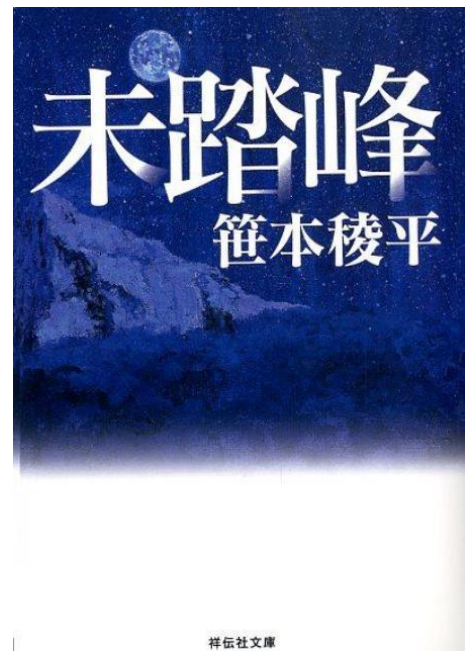


【未踏峰】 2009年 祥伝社

システムエンジニアであったが過労働で精神不安定になり衝動的に万引きをして退職させられた裕也は、北八ヶ岳の雨池の畔にありパウロさんがオーナーである山小屋に雇用される。山小屋には絵の才能があるが知的障害の慎二と、料理は天才的だがアスペルガー症候群という障害を持つため対人関係が不適なサヤカが働いている。裕也は山小屋での仕事に慣れ親しみ、8000峰を3座登頂しているパウロさんから登

山技術の指導を受ける。やがて、山小屋が出火し、パウロさんは焼死する。

残された裕也たちはパウロさんの夢を引き継ぎ、本当の自分を見つけるために、3人だけでネパール北西部にある6,720mのビンティ・チュリという未踏峰に挑戦する。



春を背負って】 2011 年 文芸春秋

亨は父が亡くなり、奥秩父の国師岳と甲武信岳の間にある梓小屋を引き継いだ。父が大学時代にワングル部にいたときの後輩であるゴロさんと、梓小屋の近くにあるシャクナゲの群生地ですべての体温症により倒れていたところを亨に助けられた美由紀との3人で小さな山小屋を切り盛りしている。亨の母親は麓の川上村で民宿を営んでいる。

梓小屋の周囲で起きる出来事を描いた短編集であり、他の作品と趣が異なり、ほのぼのとした心温まる物語である。

なお、本作品は映画化され6月14日に上映の予定であり、監督は劔岳・点の記の木村大作で、主演は松山ケンイチである。但し、山小屋の場所は立山連峰に設定され、かなり脚色されていると思われる。



【南極風】 2012 年 祥伝社

森尾は、先輩の藤木が設立しニュージーランドに限定したツアー会社に誘われ、山岳ガイドになる。このときのツアー客は男性の宮田、勝田、川井に女性の篠原、伊川であり、リーダーの藤木、臨時社員の内村、現地スタッフのケビンのスタッフと共に、森尾はアスパイアリングを目指す。

アスパイアリングの標高はマウント・クックより低く3,033mであるが、広大な氷河を

抱き、頂は鋭く天を衝いて南半球のマッターホルンと呼ばれる。今はヘリコプターで1,851mまで運んでくれるのでエキスパートでなくても登れるようになった。

彼らは雪壁をトラバースし、バットレスを登攀し、ナイフの刃のような雪稜を登り、全員が登頂に成功する。しかし、バットレスから下降しているとき突然に落石が生じ、藤木と伊川が墜落し、ケ빈は頭を負傷する。森尾は単独で懸命の捜索活動をするが、他のメンバーはルートを外れて氷河に下り、天候悪化により勝田、川井、ケ빈は低体温症で死亡する。

帰国後、森尾は生還の可能性がより低い方向に遭難者を誘導したとの理由で未必の故意で逮捕され、検察との長い戦いが始まる。



【その峰の彼方】 2014 年 文芸春秋

大学山岳部のときから傑出したクライマーである津田はOBとの確執の末に大学を中退し、アラスカに渡る。10年後に津田はマッキンリーのエキスパートとして一目置かれる存在となる。マッキンリーの標高は6,194mで7～8,000mの峰々があるヒマラヤと比べれば見劣りするが、北極圏に近い高緯度のため地球の自転の影響で低緯度の山より気圧が低く、ヒマラヤの7,000m級に相当する。また、独立峰のため気象条件が厳しい。

津田はある契機の折りに岩と氷とナイフのような雪稜とをミックスしたマッキンリーのバリエーションルートに冬季・単独で挑む。長期にわたる苛烈な登攀の後に辛うじて初登を達成するが、凍傷になり遂に低体温症に陥る。山麓では絶望視された津田を、山岳部の友人と現地のガイド仲間達が極寒の荒天に加え雪崩の危険に晒されながら必死に捜索し、奇跡的に発見する。

だが、救助された津田は・・・

